

熊本をインバウンド向け 着地型観光先進地域へ！

～オーストラリア、ベンディゴで着地型観光のノウハウを獲得～

トビタテ11期
熊本大学 笠原桜

自己紹介

熊本大学文学部コミュニケーション情報学科に所属する笠原桜と申します。

私は、大学では、Kumarismに所属し、地方創生に関わっていました。Kumarismは、熊本の観光情報サイトを運営する学生団体です。熊本地震をきっかけに県内の風評被害をなくすべく立ち上がり、飲食店や観光地を取材し、生の声を自分達の言葉で記事にすることで発信しています。

このKumarismの活動の中で、多くの方との出会いがありました。例えば、地域おこし協力隊の方や、地域観光協会の人々など。皆さん、地元の良いところをたくさん教えてください、地元愛が伝わってきました。そして、最後に決まって「この町の良いところを広めて欲しい」とおっしゃるのです。良い地域資源や観光材料をたくさん持っているが、そしてそれを地域住民もわかってはいるが、情報発信という点でうまく生かしていないという現状がありました。

このような経験から、留学によって、熊本に寄り添い熊本の良さを世界中の人に伝えられる人材になりたいと思い、トビタテに応募しました。



↑Kumarismでの取材風景



↑Kumarismサイト



留学の概要

トビタテのテーマ:熊本をインバウンド 向け着地型観光先進地域へ

留学国:オーストラリア、ベンディゴ

留学期間:2020年2月~2020年12月

(内、トビタテの計画を行えたのは、コロナの影響で2020年2月~3月の2ヶ月間)

留学目的と目標

熊本を”インバウンド向け着地型観光先進地域!”にしたい。外国人のニーズに沿った観光商品開発、ブランディング、プロモーションなど着地型観光の知識やノウハウをオーストラリアから学び、外国人観光客数を伸ばすのが私の目標です。

ここで着地型観光と外国人観光客に着目していたのは、地域への経済効果が高いと考えられたからです。まず、着地型観光では地元の企業が企画した地域ならではの観光商材を販売できるため、地域経済に効果的だと考えます。次に、外国人観光客、特に欧米豪からの観光客は、滞在日数が長く一人当たりの旅行支出が高い点、宿泊費や娯楽・サービス費など地域経済に影響を与える項目での支出が多い点から、地域への経済効果が高いと考えられます。私は熊本をインバウンド向け着地型観光先進地域にすることで熊本県経済の更なる活性化に貢献したいと考えました。

着地型観光

+

インバウンド



・地域ならではのより魅力的な観光商材を作ることが可能



・滞在日数が長い
・一人当たりの旅行支出が高い
・地域経済に影響を与える項目での支出が多い

留学先で具体的に取り組むこと(取り組みたかったこと)

①着地型観光商材企画開発のノウハウを獲得する。

- ・ビジターセンターの案内やツアーガイドとして活躍しているボランティアの方々、ツアーの企画者にインタビュー
- ・ビジターセンターでのボランティアに参加

②地域住民の観光への関わり方を調査する。

- ・地域の住民、ツアー参加者にインタビューやアンケートを行う。

③地域の魅力を発信する情報発信の技術を得る。

- ・ブログのライターやホームページ作成者にホームページの作成、ブログの記事作成について話を伺う。

④着地型観光を支えているDMOの役割、収支構造などについて、日本Bendigo Tourism職員へのインタビューを通じて日本に应用できる点がないかを考える。



なぜオーストラリア、ベンディゴ？

ベンディゴは、オーストラリア南部に位置する、ヴィクトリア州内の地方都市です。

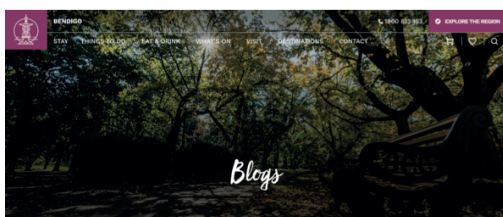
この都市を調査するのは、Australian Tourism Awardで複数回受賞歴があるなどベンディゴが着地型観光や観光客へのサポート面で優れており、興味深い活動がいくつもあるためでした。

一つ目に、ベンディゴには、地元の食材を食べ、生産者に生産秘話を聞く”Food Fossicking Tours”や、地元の人々と朝からサイクリングするイベントなど、地域の魅力を引き出す観光商材が多くありました。これらの活動はどれも地域との繋がりを重視した内容であり、学ぶべき点も多いと考えました。

二つ目に、ベンディゴの地域DMO、Bendigo Tourismのホームページを見たところ、100カ国語以上の中から言語を選択でき、観光情報を探しやすいレイアウトでした。また、サイト内では地元の人が書いたブログが掲載されており、ベンディゴでの過ごし方を深く知ることができました。

第三に、着地型観光の主体となる組織や運営についての知識を獲得したいと考えました。

日本ではDMOと言っても、観光協会の「看板の掛け替え」的なケースが多々あり、ノウハウや資金、人材面が弱い組織が多いのが現状でした。一方オーストラリアでは、DMOがデータ収集を行い、Visitor Centerやツアーを運営するなど、地域内で役割が果たされていました。着地型観光を支えているBendigo Tourismの役割、収支構造などについて、Bendigo Tourism職員へのインタビューを通じて情報を得ることで日本に应用できる点がないかを考えたいと思っていました。



留学前の取り組み

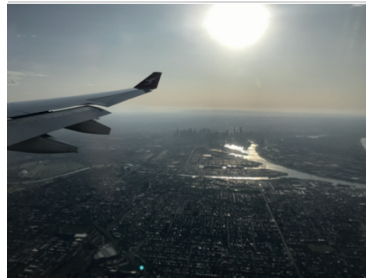
留学計画実現のため、事前に熊本県のインバウンド、着地型観光の具体的取り組みを調べました。例えば、阿蘇市観光協会の「ふらっと内牧」プロジェクトです。実際に「ふらっと内牧」プロジェクトを指揮していた方に、お話を伺いに行きました。

内牧では、数年前から滞在型観光地を目指して、いち早くインバウンドの受け入れを進めていました。このイノベーションの興味深い点は、「夕食等の食事を旅館ではなく地域内の飲食店で食べたい」というニーズを満たし、外国人から寄せられた「どこで何を食べられるのか分からない」「英語が伝わらず注文しにくい」といった課題を克服する為に「飲食店回遊の仕組み」を作り上げた点にありました。また、外国人向けにメニュー、ポスター、webサイトといった情報媒体の多言語化も充実しています。滞在型観光地を目指した取り組みは、熊本を訪れた外国人観光客の平均宿泊数増加にも効果的だとわかりました。

また、海外向けサイトで高い評価を得ている旅館「蘇山郷」の取り組み、熊本のインバウンドを牽引しているくまもとDMCさんでも現在行っている取り組みについてお話を伺いました。

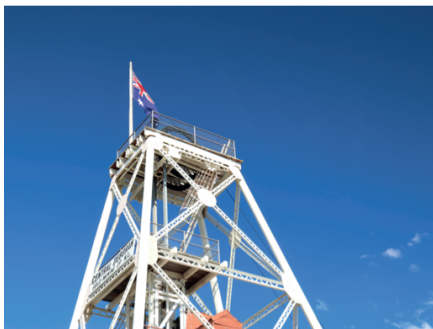
2020年1月30日 いざ、オーストラリアへ

英語力なし、知り合いなしの中、全く新しい土地での生活がスタートしました。学校に学生寮がないため、シェアハウスに住み、平日はTAFEと呼ばれる専門学校に通いながら、トビタテの活動を始めて行くこととなりました。



2月 活動の基盤づくり

- ・円滑に活動を行い、現地の人々の信頼を得るため、英語力の向上を図った。
 - －ハウスメイトやクラスメイトに自ら話しかけ、コミュニケーション能力を鍛える
 - －Youtube動画でシャドーイングを行う
- ・活動を行う上での手がかりを得るため、地域のコミュニティや近くの大学の活動に参加し、知り合いの輪を広げた。
 - －近くの大学の学生にコンタクトを取り、複数のサークルに入れてもらう。
 - －教会に赴き、地域の人たちとコミュニケーションをとった
 - －図書館で英語の学習グループを見つけ、参加することにした。
- ・時間がある今のうちに、Bendigoの観光地や、ツアー、ビジターセンターなども訪れ、Bendigoの観光が実際どのように機能しているのか観察する。



↑Bendigoは、ゴールドラッシュで栄えた町です。町の中には、金の採掘場が残っており、地下まで行くことができます。また、古い建物も残されており、重要文化財となっています。



↑近くの大学のサークル活動です。大学外の人には、参加を通常認めていないようでしたが、ご厚意で入れてもらえることになりました。



↑Bendigoの、シンボリック存在の噴水です。Bendigotourismのロゴにもなっています。

3月前半 徐々に活動が本格化

- Bendigo visitor centreを何度か訪れ、案内をしている人にBendigoの観光地について話を伺った。
一案内係の人たちはボランティアで、30年以上ボランティアに携わっている方もいた。
- 留学前に注目していたツアーの一つ、Bendigo photography tourに申し込んだ。
- Bendigoで150年以上続いている伝統的なイースターのお祭りでボランティアを行う申請を行った。
- 引き続き英語の学習は強化し、Youtube、映画、podcastなどを活用し、リスニング能力の向上に勤めた。
- 熊本の魅力を伝えるイベントや展示などやりたいと考えていた。いくつか使えそうな場所を見つけ、また、学校の展示会も候補の一つに考えていた。



↑ベンディゴ 観光の基盤となる、ツーリズムオフィスです。
オーストラリアでは、至る所に、information の i をあしらったシンボルがあり、この場所に行けば観光情報が手に入ります。ここでは、主に観光客のサポート、観光のアドバイス、ツアーの予約などを受けることができます。
細かく教えてもらえるので、オーストラリアを観光する際は、まずこの場所で情報収集をしていました。町と町を移動する際にも、道端に、観光オフィスまでが看板で出ており、外国人にとってもとても観光しやすいと感じていました。

3月後半 オーストラリアでもコロナが拡大

- イースターのお祭り
→コロナでキャンセル
- Bendigo photography tour
→同じくキャンセル

コロナが拡大し、オーストラリアはロックダウンすることに。
また、日本政府が定める外務省海外危険度レベルが全世界2以上に引き上げられる

→やむなく
トビタテ中断へ

コロナ禍のオーストラリアの状況

- オーストラリアも、日本と同様、観光どころではない状態でした。
- 3月29日、第一波の最大新規感染者数348人を記録
 - マスクは外出時着用義務(罰金あり)
 - 州境間の移動は規制あり
 - 学校は休校、もしくはオンライン授業
 - サービス業などは、薬局、スーパーなどの生活必需品のみオープン



4月～ 帰国が残るかという選択

奨学金も停止したため、帰国するか、自費で滞在を続け、トビタテ再開を待つかという選択をすることとなりました。お金がない、オーストラリアでコロナにかかる可能性もある、日本への飛行機がいつ止まるか分からないというこの状況の中、帰国を一時は考えました。ですが、そんな時にスティーブ・ジョブズのコネクティングドットについてのスピーチを聞き、自分の選択に自信を持つこと、いつかそれが将来につながると信じるのが大事だと思い、滞在することを選びました。

また、トビタテの活動は一時的に中断することになりますが、語学や文化、所属していた専門学校でのコース、この留学を通して自立するといった、他の目標は自分次第で達成でき、この留学を良いものにするかどうかは自分次第だと思っていました。

それでも、滞在するからには困難がありました。

困難1 金銭的問題

奨学金が停止されることとなり、現地での滞在費を自分で稼ぐ必要がありました。実家の両親には、金銭的な支援を頼むことはできず、自分で残ると決めたからには、自分でどうにかするしかありませんでした。家賃が55000円程と安かったのは幸いでした。

克服1 金銭的問題を克服

<5月>

メディアを運営している日本の会社に、ライターとして雇ってもらえないかと交渉し、ライターとしてのお仕事をいただきました。

<6月>

履歴書を配り、1件、テイクアウトで営業を続けているケバブ屋さんから連絡をもらいました。(オーストラリアでは、アルバイトを探す際には、履歴書を直接手渡しする方法が一般的です。また、学生ビザでのアルバイトが認められています。)

トライアル(試用期間)を経て、結果的に雇ってもらえることになりましたが、英語で接客をする自信のなさを漏らすと、断られそうにもなり、日本的な謙虚さは、経験重視のオーストラリアで仕事を探す際は、仇となるのだと学びました。

結果的に、このお店では半年ほど働き、金銭的問題の解決だけでなく、英語力も飛躍的に伸ばすことができ、困難な状況を転機に代えるのも自分なのだと学びました。

困難2 コミュニケーション不足に苦しむ

留学始めに、積極的にクラスメイトとコミュニケーションをとっていたのですが、授業は全てオンライン授業に。また、参加していたコミュニティは全て活動休止となり、留学序盤で作上げたコミュニティや人間関係が、崩れてしまいました。不要な外出は避ける必要があったため、コミュニケーションを取る場といえば、ハウスメイトかアルバイトのみで、物足りなさを感じていました。

克服2 コミュニケーション不足を克服

- ・ハウスメイトとの時間を大切に
 - ハウスメイトと散歩に行く
 - ジャムやケーキ作りをする
 - 寿司パーティーを開く
- ・meetupなど、オンラインで行われている言語交換に参加する
- ・自分の時間を生かして新しいことを始める
 - ウクレレ
 - 読書
 - 絵を描くことなど
- ・アルバイトでは、積極的に接客をし、お客さんとコミュニケーションを取るようにした。





↑ハウスメイトを誘って、手巻き寿司パーティーをしました。



↑ハウスメイトに、オーストラリアのお菓子、スティッキーデートブディングの作り方を習っているところです。



↑一人の時間を生かして、新しい趣味も始めていました。

留学前後で変わったこと、留学先で学んだこと

①持っているものに感謝する

一度、日本を離れて、家族も友人もない、全く新しい土地で暮らしたことで、今まで自分が生活してきた環境も、家族にも、友人にも恵まれていたのだと気付きました。また、自分一人ですぐにかできると思っていたものが、気づくと人に助けってもらっており、改めて自分が一人では生きていけないと感じました。この気持ちを忘れず、今自分が持っているものに感謝して、生きていきたいと思いました。

②影響の範囲内でできることを考え、行動に移す

この留学期間中、思い通りにいかないこともたくさんありました。それでも、滞在を続けてこれたのは、環境に言い訳をせず、常に自分がその中でできることを考えて実行してきたからだと思います。

③常識、当たり前に振り回されなくなった

文化や価値観の違いに驚かされることも多く、一歩日本の外に出ると、常識や当たり前だと思っていたことがそうとも限らないと学びました。だからこそ、違いを違いとして受け入れる多様性が身についたとともに、常識だと思っていたことも疑ってみるようになりました。

将来の夢(熊本への貢献)

熊本を、国内外問わず世界中から”熊本に“来てもらい、”熊本で“数日間宿泊し、”熊本を”、観光してもらえる地域にしたいです。そして、私の郷里熊本の魅力を世界中の人に感じてもらいたいです。

同時に、今回のコロナを通して、インバウンド観光に頼るだけでは、安定的な地方創生は難しいとも感じています。観光だけでなく、熊本を盛り上げる方法をこれから模索していきたいです。

支援企業の皆様への感謝

支援企業の皆様、この度は、私の留学を支援してくださり、誠にありがとうございます。皆様のご支援なしには実現できなかった留学です。

私の場合は、留学2ヶ月でコロナの影響があり、トビタテで計画していた留学を行うことはできませんでしたが、皆様へのご恩をいつか必ずお返しできるよう、そして、熊本を背負っていける人間になれるよう頑張ります。

改めまして、ご支援をいただき、ありがとうございました。